

# 西田幾多郎『善の研究』 人間の最深なる要求

京都大学文学部第7講義室

2015年4月17日(日)10:00~12:00

## 0 はじめに

善…最も深い要求を満たす

ex) 自分の欲だけを優先するよりも他の人のことも考えての要求の方が深い人によって善の基準が異なるのではないかという反論が考えられる。

## 1 実在の真景

西田の考えは「正しい前提から正しい推論をして出てきた結果は正しい」ではなく「信じざるを得ないことを広げていく」という感じ

意識現象が唯一の実在である

この主張は思惟と演繹の結果出てくるものではなく、確信を持って直感できることを広げていった結果たどり着くものであり、真にそれに納得していないのに無理にそれを正しいと思うことはない(そういう仕方でも正しいんだと思うことは、形式的に従うということではなく、人間がそれで真に満足することはできない。それがどう悪いのかは、この後で善を論じるころまで行くとわかるようになる。)

これを出立点として、実在を考えていく。

意識現象のみが実在であると述べたが、では実在でないものとは？

ex) 「黒板を見ていた」「私が見ていた」

これは元となる経験(意識現象)から抽象されたものである。

… 純粹経験

(その元となる経験は、その全体を言葉で言い表すことはできないほど豊富なもの。)

## 2 実在は「統一的或る者」の分化発展である

この実在というのはどういうものなのか。

ex) 心に浮かんだ問いを考える

考えが順調に進んでいるとき、答えに近づいている感じがある。たとえば、自分の生きる意味を考えたときか、あるいは数学しているときか、自分の経験を振り返って、よく集中できていた思考を思い起こすと何を言っているのかわかると思う。

ex) 音楽家の演奏

熟練した演奏の場合、演奏家の音楽的感覚の理想がすでにあって、それを実現すべく身体が動く。後からああ動いていたとか息を吹き込んでいたとかがわかる。演奏家の理想とする音楽的感覚があってそれを実現すべく身体が動く。一方、未熟な場合、各々の身体の動かし方に演奏としての統一ができていない。すなわち、身体の動かし方を、部分部分でバラバラにここではドの音、ここではミの音とか意識しながら演奏するとか、その場で自身のミスに気づき、その場で直そうとするとか、ミスとまではいなくても、演奏が終わってからまだ何か違うと感じたりといったように、不調和を感じる。これは、純粹経験が破れた状態である。そして、熟練してくると、その音楽的感覚がより具体的となってきた、それはすなわち、身体の動かし方が、音楽的感覚のもとにより厳密に統一されていっているということになる。

ex) 赤色を知覚

- これを見たとき赤だと思うのは赤色を知覚しようとする目的にしたがって、一般なる色の感覚が赤と赤でない色に分化する。もっとよく色を認識しようすると、その意志にしたがって色がさらに分化し、(後に反省すると) 薄い赤とか濃い赤と判断されるような純粹経験となる。

これらの例を考えてわかるように、すべて実在は、一つの者が発展していく活動であり、他方より見れば矛盾対立を増やしていく活動である。

比喩的な説明を行うと、実在は、受精卵からカエルに成長していく活動のようなものである。受精卵には、はじめからどのように成長していくのかという情報が入っていて(理想・目的)、それに従って成長し(これを進めるのが意志)、各部分が眼や足へと分化していく(生物学的に正確に言うともう少し臨機応変なものらしいが、ここでは比喩的説明として簡単なイメージを述べた)。色彩感覚の分化発展、演奏感覚の分化発展、問いを考える感覚(?)の分化発展はこれのようなもので、それが赤色であったとか、あのタイミングであのように体を動かしたとか、あのように考えたとか判断・分析するというのは、カエルの全体ではなく、眼だけ取り出して見たりするようなことである。

各純粹経験もまた統一されている。つまり、「私の経験」と表現しうる。なお、「私」には他者も含まれる。これが真の自己として実感できる。

### 3 善

すべては統一的或る者の分化発展

→ より発展の進んだもの、より大きな統一(すなわちより多くの矛盾対立を調和統一したもの)がより有力な実在

真の自己の統一作用の要求に従って調和統一を大きくしていくことが善である。このことを、「人格の実現」「客観と一致」と言うこともある(人格というのは、真の自己の統一力のこと。客観というのは、最も有力にして統括的な表象の体系)。また、統一を大きくしていくということは、より具体的とか個人的とかいうようにも言う(演奏の例を思うと、理想がよりはっきりとし、意志がそれにより厳密にしたがって働けるようになるということだから、そう言えることも納得できると思う)。

なお、真の自己とは、他人も含むような世界全体であるので、それを無視するのはカエルの足だけを見ているようなものであり、抽象的に自分の思惟の結果がそうと思っただけである。

ここまでくると最初の反論「他人のためにそうするというのは所詮人によるのではないか?」ということに対して説明を与えることができる。すなわち、そのような行為は他者を含まない意味での自己のみを見た抽象によるものであり、真の自己の統一力(人格)への裏切りであるということ。

## 4 宗教

最深なる要求 = 宗教的要求 (単にそう名づけているだけではなく、仏教やキリスト教もその根本はこのようである。)

最近では宗教というと、なんだかとりあえず信じこむことができれば安心が得られるというようなものと思われがちだが、信仰というのはむしろ、人間として持っている弱さ (ともすれば自他对立的な意味での自分の物質的利益を求めらばかりになってしまったりする) を克服して最深なる統一に至ろうとするためのものだと思う (発表者の考え)。

ex) お天道様が見ている

真の自己を太陽に投影している。心の底で太陽を敬う気持ちを可視化し、甘えてしまう自分を律するための優秀なツールである。

## 5 いろいろ考えてみる

ここからは講義した人の考えである。

要求：統一を大きくしたい

この要求が満たされたときには大きな喜びが伴う

科学を学ぶとは、(具体的) 統一を大きくすることである。多くの人は学んだつもりでも、それほど喜びを感じない。学んだつもりというのは、形式的 (抽象的) にわかったというだけで、その深く具体的な理解を得ていない状態である。深き実に至らんとするという科学者の目的は、芸術家が従っている要求と同じ。したがって、真の自己の要求を満たすためのものであるから、科学は芸術の一部門であるとも言えるのではないか。これは、宗教が愛ゆえに人々を教え諭すのと変わらない。人間活動自体が芸術であると考えてもよい。

参考：ニュートンやケプラー、岡潔

「ニュートンやケプラーは天体の運行を見て敬虔の念に打たれた」

(芸術家や科学者や数学者といった、統一を大きくしていくという真の自己の要求に素直に従い、その深きに到った人々がどのように感じていたのかを知ろうとすることで、人間の活動 (要求) とはどのようなものであるのかがだんだんと具体的に想像できてくる。)

科学とは

参考：中谷宇吉郎『科学と文化』(青空文庫)

科学は必ずしも役に立たなければいけないものではない。面白ければそれで良いもの。

「役に立つ」… 生活を楽にするとかそういう意味で言っている場合が多い

この極地は何もしないでも生活ができるようになる。しかし生活がどんなに楽になっても心の乾きは癒えない。(生活を楽にするというのは目的ではなく、むしろ、そうすることで生活することにとらわれず自己の深い要求を満たすことに専念しやすくなるという手段だと思う。)

役にたつことばかりを考えていると、結局生活に困窮して日々生活を考えるのに精一杯である人と変わらない。生活のことしか考えられていないというのは非常に浅いところまでしか行けてないと思う。

学問とは、人々が統一を大きくしてきた営みに触れる一面もあるが、よく考えながら触れないと大した喜びは得られない。つまり、過去の人々の喜びを追体験できない。

「役に立つのか」という問いを発する人は、現に生活出来ているにもかかわらず、生活の要求するところ以上のところにいけない、つまり精神的な要求に至れない (浅薄なる要求ばかりで留まっている) 人であると言える。